

4年ぶり 交流と理解深めた2週間

タイ・コンケン大から交換研修生

タイ・コンケン大学からの交換研修生4人が2週間の研修期間を終え、14日（水）、無事タイに帰国しました。

コロナ禍のため4年ぶりとなった今回の訪問、本学学生、教職員との交流は2日（金）のウェルカムパーティーでスタートしました。研修生は期間中、熊本医療センターやKMバイオリジクスなどの施設を視察し、本学では医学検査学科やリハビリテーション学科の授業に参加しました。

また、休日にはサポート学生たちと阿蘇や熊本城などの観光を楽しみました。平日の午前中は主に日本語交流としてサポート学生たちと日本語を学び、昼は学生たちとレストランで食事を共にしました。

13日（火）にあった交流を締めくくるさよならパーティーでは、目に涙を浮かべ、別れを惜しむ学生たちの姿も見られました。（入試・広報課）

※本学からは9月7～20日、6人の学生がコンケン大学を訪問します。

施設見学や授業参加／熊本の名所も満喫



さよならパーティーで、別れを惜しむ研修生と学生たち



本学研究室で、真剣な表情で説明を聞く研修生たち（右）



熊本医療センターのヘリポートで、本学職員（中央）と記念撮影する研修生



研修の合間には、日本文化に触れる機会も。お点前を楽しみ生け花にも挑戦しました



田中講師（リハ学科 PT専攻）に学会長賞

リハビリテーション学科の田中貴士講師（理学療法専攻）の研究発表が、第25回熊本県理学療法士学会で、最優秀賞にあたる学会長賞を獲得しました。

学会は、昨年11月20日（日）にウェブで開催。「高齢期の脳損傷マウスにおける神経回路再編に寄与する遺伝子の解析」と題した田中講師の研究は、一般演題36本の中から学会長賞に選ばれました。6月25日（日）に熊本県理学療法士協会定時総会（熊本総合医療リハビリテーション学院）で行われた授賞式で表彰されました。

田中講師は、脳に損傷を与えたマウスの実験では若齢期の研究が多く、高齢期の研究は少ないと指摘。臨床の実態に合わせて、取り組みの少ない高齢期の損傷モデルマウスに着目し、研究を続けてきました。高齢期では若齢期にみられる脳損傷後の神経修復や運動機能の回復が失われることを明らかにし、その原因の一端を脳の遺伝子解析によって示しました。

田中講師は「研究成果が少しずつ評価され始め、

嬉しく思います。諸先生方や学生とともにリハビリの基礎研究を進展させ、熊本から健康長寿の実現に貢献したいと思います」と、話していました。（入試・広報課）



授賞式で表彰される学会長賞の田中講師（左）

銀杏アラカルト

1年次生を前に講話をする竹屋学長



「学ぶことの意味」熱く語る

竹屋学長が

Dive! LSP プログラムのひとつである「トップ講話」が19日（月）、50周年記念館で開催されました。竹屋元裕学長が登壇し、「学ぶことの意味とは？」と題して自身の経歴をたどりながら、全学の1年次生に向けて語りました。

竹屋学長は、北里柴三郎と師のマンズフェルトとの対話を引用しながら、柴三郎が「医学また学ぶに足る」との心境に至った経緯を紹介。これを踏まえ、学長自身が「病理学」の道に進む要因となった祖父竹屋男綱元銀杏短期大学学長との触れ合いにも言及しました。竹屋学長は、幼少期から男綱氏の実験の手伝いをしてきたといい、その影響で基礎医学者を目指して熊本大学医学部に入学したということです。

講話では自身の大学生活や米国留学の経験なども披露し、会場の学生たちは熱心に耳を傾けていました。講話後は学生たちの間から多くの質問が飛び出していました。（入試・広報課）

◆将来に向けライフデザインを 「ライフデザイン講座」が16日（金）、1301L講義室であり、医学検査学科1年次生が講師の熊本県子ども未来課の江藤憲子課長補佐とともに、自身の生き方や生涯の生活を積極的に実現していく「ライフデザイン」について考えました。江藤氏は、昨今問題となっている少子化の現状を説明し、晩婚化や未婚者の増加がその要因と指摘。これを踏まえ、将来への漠然とした不安を乗り越えるためにライフデザインを描くことを推奨しました。また、こども基本法の施行やこども家庭庁の発足といった少子化対策にも触れたほか、県でも結婚について考えるイベントや子育て相談システムなどがあることを紹介しました。（入試・広報課）